医師会長エッセイ

ポラリスを仰ぐ北の大地から

グローバル化と下手な日本語

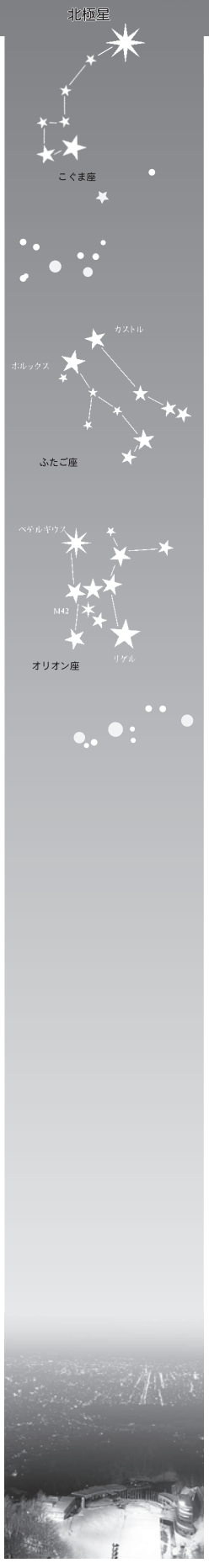
美唄市医師会 会長　石本（いしもと）　隆広（たかひろ）

この原稿を書いている今現在は１月10日であり、巷ではインフルエンザやコロナなどの感染症が猛威を振るっており、咳止めなどの処方薬が品切れになるなど、診療に多大な悪影響が出ているが、さすがに３月頃には落ち着いていてほしいと切に願っている。

この原稿が掲載されるまでの間にさっぽろ雪まつりが行われているはずであり、当然、多くの外国人観光客が訪れているはずである。そうでなくても、たまに札幌駅などに出かけると外国人観光客がいたるところにいて、一昔前のことを考えると隔世の感がある。

最近のグローバル化の波は凄まじく、意外にも当地、美唄市にも外国人観光客が多く訪れているようである。かねてから、いったい冬の美唄のどこに来ているのだろうと不思議に思っていたのであるが、市内のゴルフ場が冬期間、「スノーランド」という雪に触れ合うイベントを開催しており、スノーモービルで雪上を滑走したり、雪合戦のようなこともしているらしい。これが南国出身の外国人観光客に受けているのだそうである。よく美唄駅の前で外国人の子供たちが雪遊びをして楽しんでいるのを見ているとこちらも心が和む。当地では雪は邪魔者以外の何者でもないと思っていたが、こういう利用法もよいものだと感心させられた。

「スノーランド」の利用客ではないが、当地にも、外国人の患者さんが数名受診している。どの方も日本語でコミュニケーションが可能な方であり、幸い診療には差し障りはないが、そのうち、外国人ともコミュニケーションを日本語以外の言語で取らなければならなくなるかもしれないと考えた。そこで、アプリで翻訳ソフトを入れてみたが、使う方の問題があるのか、あまり上手な表現ができない。まずは、翻訳ソフトがうまく作動してくれるように自身の日本語を磨く必要を痛感している。



僻地のエリートコース

紋別医師会 会長　武田（たけだ）　彰久（あきひさ）

以前私は、北海道の都市部ではなく、いわゆる僻地で開業している数人の先生に出身地を聞いたことがあります。すると、その先生の多くは、開業されている近隣地域の出身者でした。そしていわゆる幼少期から僻地のエリートコースを歩んだ人でした。

このエリートコースを歩める僻地の子供は多くありません。この道を歩むにはいくつかの恵まれた環境が必要になります。本人の資質はもちろん、両親の理解、金銭的支援、学習および教育環境が大きな要因となります。インターネット環境の充実した現代では、都市部と僻地で教育環境に大きな違いはないという人もいますが、特に学習環境には大きな違いがあります。つまり、いくら資質があったとしても、僻地での学習環境は決して医学部進学には適した環境ではありません。

近所の幼馴染みがそのまま高校の同級生となり、社会人となってからは多職種間で横のつながりになる、それが僻地です。また、僻地産業の多くは一次産業の割合が高く、時の流れがゆったり進むような社会傾向の中で、幼少期から友人関係や親同士さえも濃厚な関係を築き、互いに大きな影響を与えながら成長する世界です。そんな生活環境の中、短時間で多くの学習量を要する僻地のエリートコースを歩むことは極めて困難になるからです。

有名大学をともに目指す友人たちと切磋琢磨し、それを支える親が互いに情報を共有し合い、短時間で多くの学習量を得る手段を得てともに高みを目指す都市部の子供達がいる一方で、僻地特有の濃厚な人間関係を築きながら、スローな社会環境や伝統的な産業基盤の中で育ち、周囲に同志もなく１人で高い偏差値を叩き出さなければならないわけです。

医学部進学を語る上でこの僻地は都市部と比べてどうしてもハンディキャップがあります。それゆえ、地域が一体となって子供の学習環境を考え直し、僻地のエリートコースを歩み、地元で開業する先生が10年に１度、１人でも現れることを願っています。